

## 2021年度 コロナ禍における英語授業実践報告

石川 英司

### はじめに

2020年の年明けから世界的な蔓延を見せた新型コロナウイルス感染症とその対策の影響により、本学における教育、特に授業の運営において以前とは異なる対応を余儀なくされてきた。2020年度は感染症対策を導入した最初の年という事もあり、前期は専任教員が作成した動画をオンデマンド教材とし、学生には随時受講してもらうという授業形態が中心であった。同年度の後期には、専任・非常勤問わずそれぞれの教員が担当の授業をオンライン（リアルタイム配信やハイブリッド等）で行った。切迫した状況において様々な状況に対応しなければならなかった中で準備を行い、授業に臨んだことは心身共に容易ならざるものであったが、その後につながる経験としては代え難いものを得たように思う。

2021年度は、対面を基本とする授業形態が推奨され、ほとんどの授業においてほぼ全面的に対面形式の授業を実施することができた。新規感染者数の増減に応じて、登校することができない学生にはその都度ハイフレックス型授業とオンラインでの資料配信を用いて柔軟に対応した。本稿では、2021年度に行った英語の授業について詳述する。

### 1. 全担当科目共通事項

今年度は、コミュニケーション基礎英語C, D, コミュニケーション英語A, B, 資格英語IA, IB, ビジネス英会話A, Bを担当した。それぞれの科目において学生の英語力や所属学部などの違いはあるが、ここではこれらの科目に共通した内容を説明する。

担当科目全ての授業において準備段階では、授業で用いる資料を教員のノートパソコンから教室内プロジェクターで提示できるものとした。これは新型コロナウイルス感染症の新規感染者数の変化により、授業形態に関する大学の方針が変わり、学期途中の授業形態の変更を求められた際に備えたものである。学生の出欠確認については、出欠管理システムとカードリーダーが導入された最初の年ということもあり、カードリーダーによる記録とZoomによる記録の2本立てで行った。学生は教室に到着した際、カードリーダーによる学生証の読み込みと授業開始時に教員が立ち上げるZoomミ

ーティングに参加しチャットに氏名と学籍番号を送信することとした。

授業中には、感染症対策に配慮しつつ語学科目として最低限必要な発話をともなう英語活動を取り入れた。学生はほぼ毎回の授業で、学生同士のペアワークを行なった。ペアワークの主な内容は、英文の意味を口頭で確認する、覚えた単語をクイズ形式で尋ね答え合う、短いダイアログを暗唱し、教員に対して発表するなどである。また、教科書の例文などを参考に学生自身が考えた英文などをペアで互いに対して口述し、その内容を書き起こしたものを課題の一部としてWebClassにて提出させるなどした。ハイフレックス授業の場合にはこれらの英語活動はブレイクアウトルームを用いて行った。この他、学生が出来るだけ多く発言する機会を設けるために、学生同士で相談する時間や、教員から学生へ問題の答えなどを問いかけるなどした。

毎授業後には課題を出していたが、その主な内容は、授業に学生が作成した英文の提出、あらたな英作文等の作成、ペアワークで共有した内容の提出、または教科書内の問題の一部を前もって取り組むことである。これらの課題には、授業の予習・復習的な効果を期待すると同時に、ペアワークにおいて二人のうち片方が教室での英語活動に取り組まないという状況を避ける目的もあった。つまり、課題として提出しなければならないと分かっている場合、学生はより意欲的にペアワークに取り組むようになると思われたからである。また、長文やリスニング教材を使用した授業の後には、WebClassにて授業資料として長文の和訳やリスニングのスクリプト等をPDFファイルで掲載した。

中間および期末試験は、すべてオンデマンド型で行った。試験問題をWebClassに掲載し一定期間（一週間程度）アクセス可能にし、学生は期間内に都合の良い場所と日時を独自で選び受験するものとした。

## 2. 科目別事項

先述の全担当科目共通事項に加えて、ここでは各科目において重視した点や主に取り組んだことなどについて説明する。

### コミュニケーション基礎英語C、D

1年生を対象とする本必修科目では、学生がこれまでに培ってきた英語の復習に加えて、ディプロマポリシーの一つである「広い教養と深い専門的な知識や技能を備え、地域社会や国際社会で活躍できる能力」を念頭に、英語でコミュニケーションがとれるようになるための練習をより多く取り入れた。昨今では様々な高校で双方向のかつコミュニケーションな英語の授業を展開しているが、学生の様子からは、英語を知識として取り入れるだけの一方向的な授業に慣れているように思われる。後述するが、学生から肯定的な感触を得られている点からも学生にとってはやはりただ聞いて

いるだけの授業よりも自身が発言する機会の多い授業の方が楽しみやすいことは明確であろう。

#### コミュニケーション英語 A, B

本科目は、TOEIC受験対策に重点を置いた科目で、対象を2年生としている。授業の方針としては、英語によるコミュニケーション能力の向上という基礎は残しつつも、より高いTOEICスコアを目指すこととした。そのため、教科書はTOEICの問題形式に近いものを採用し、授業内容も問題演習を中心とした。

#### 資格英語 IA, IB

当初の履修学生数が60名近い状況の中で教室変更を余儀なくされ、大教室でのスタートとなった影響もあり、コミュニケーション能力の醸成に重点を置く授業の運営が難しい授業となった。もともとTOEICスコア向上に重点を置く選択科目であり、受講学生数からも講義形式の授業はやむを得ないという判断により先述のコミュニケーション英語 A, Bのような授業でさらに問題演習に重きがおかれた授業となった。

#### ビジネス英会話 A, B

現代政策学部の3年生以上を対象とした選択科目だけあり、英語学習に対する意欲と英語力の双方を備えた学生が履修した。一般企業において、英語でコミュニケーションをとる場面を想定し、教科書内で提示される様々なビジネスシーンに応じた会話表現を練習した。受講学生数が4, 5名と少数であったことと学生の英語力が高めだったことで英語と日本語を併用して授業を行うことができた。また、英語力の高い交換留学生が受講してくれたおかげで日本人学生にとっても英語で積極的に発話する良い刺激となったように思われる。

### 3. 学生の反応

これまでに述べてきた授業運営について、教室での学生の様子と2021年前期授業のアンケートの自由記述欄に寄せられたコメントを参考に学生の反応を考察する。一般的に言えることとして、多くの学生は他の学生とのコミュニケーションに対して肯定的に捉えていると感じられた。やはりコロナ禍では以前に比べて他人とコミュニケーションを取る機会が限られるからだと思われる。ペアワークについての好意的な意見には以下のようなものがあった。「... 他のクラスメートの皆さんと英会話することもできてお互いの英語力が向上しました。」「ペアで最後にやる活動がすごくいいものだった。」「ペアワークも適度にあり、積極的に参加することができた。」ただ、コロナ禍において教室内で他の学生と近づいて授業を受けることに抵抗を感じる学生も

一部みられた。他の授業がハイフレックス型へ移行する中で語学の授業は対面を基本としていることに不安を感じる学生もみられた。

また、教員の判断でグループワークを多用しなかったが、これについて「対面やオンラインでも、グループワークのようなディスカッションをもっと取り入れるべきだと思います。」という意見もみられた。この点については教室でも、ペアワークのパートナーが毎回同じだと学生が飽きてしまう、相手によって英語活動の質が下がってしまうことに不満を抱えている様子が散見された。これは教室でのみならず、ブレイクアウトルームにおいてはより顕著である。実際に、ペアワークの相手の反応がない、常に一方のみが発言しているなどの相談があった。

アンケートのコメント欄には記述がなかったが、ハイフレックス型の授業においては教員がオンラインの学生とやり取りをしている間に教室の学生が注意力を失うような様子も垣間見られた。また、教員が使用するデジタル機器の操作や授業環境を整えるのに時間を費やしすぎてしまい、学生の集中力に悪影響を及ぼしている様子もみられた。

#### 4. 課題と展望

2020年度を「コロナ対策初年度」とするならば、2021年度は初年度の経験を活かしてコロナ禍での語学教育を前進させることのできた年と言えよう。本稿の最後に、コロナ禍における語学教育の課題と展望について述べる。

2022年度以降も状況により対面型とハイフレックス型を組み合わせる授業を進める可能性がある現時点においては、Zoomを用いた授業運営を前提とする必要がある。まず一番の課題と言えるのは、ハイフレックス型の授業を進める際に、教室にて対面授業を受けている学生とオンラインで受講している学生が享受する教育効果の格差である。学生個人の性格や気質によってどちらが最善とは一概に言えないが、仮に同じような条件の学生が対面とオンラインのどちらかを受けていた場合に教育者として同じ質の教育を提供しているとはいえない。どちらかが圧倒的に良いとも悪いとも言えないが、全学生が同じ教室に存在し、教員はその場の学生にのみ注意を払えばよい環境と、教員として同時に対面とオンラインの双方向に注意を傾ける必要のある環境とでは、後者の教育効果が劣るのではないかと懸念がある。これは教員側の資質や工夫によって改善の余地があるのかもしれないが、現時点で画期的な対策を見出すには至らない。具体的には、従来の対面授業では可能であった机間巡視はペアワークやグループワークの進捗状況を把握する上で非常に有効だが、Zoomのブレイクアウトルームにおいては各ルームを訪れて様子を伺うことが難しいことに加えて、その間に教員は教室の学生に対して一切注意を払えなくなるという欠点がある。また、試験をオンデマンド型で行った場合は、個人認証やカンニング対策という点、すなわち公

平性の担保という点においても課題が残る。

一方で、コロナ禍における授業において来年度以降、感染症対策の必要性の有無にかかわらず有益だと思われる点がいくつか見られた。まず第一に、教員から学生に対する授業資料の配布方法である。新型コロナウイルス感染症がまん延する以前には、配布物と言えば紙媒体が当然であったのに対して、コロナ禍以降にはWebClassなどを利用したデジタル配信が通常となりつつある。これは、特定の授業に欠席した学生や配布物を紛失した学生への対応を容易にするだけでなく、そもそも教員が配布物を印刷する必要がなくなったという点において画期的である。第二の利点として、学生が教員への連絡や相談の手段としてWebClass上のチャットやメール機能を利用できるということが挙げられる。教員が頻繁にメールチェックをする必要が出てくるといふ点は考慮する余地があるので使用の際には教員と学生双方の明確なルール作りが必須であるが、学生からの視点で見れば、面と向かって言いづらい内容も気軽に連絡が出来るという点においては有効な連絡手段であると言える。最後の利点として、あくまで語学の授業において全般として対面に勝る授業形態はないという前提はあるものの、オンライン受講のほうがより自身の意見を表明し易い、または他の学生とコミュニケーションが取りやすいと感じる学生にとっては授業参加がしやすくなる形態の一つであるという点である。これから先、さらなる新種の伝染病が蔓延する可能性もゼロではない時世において、他人と一定の距離（物理的、オンライン的を問わず）を置きつつも効率的かつ効果的にコミュニケーションを取ることのできる能力は必須であると考えられる。

## おわりに

未曾有の事態に対処すべく限られた時間の中でさまざまな試行錯誤を繰り返してきた中で、多くの収穫もあった。個人的には、自身の準備や対応力の欠如によって授業の一部に不備が出てしまったことは否めない。平時からの自分自身の課題に加えて、コロナ禍での困難や葛藤が、来年度以降のより良い授業につながるよう、これまで培った経験を活かしていきたい。